

東京市豊島區目白町に於ける鑿井の

結果に就て

大炊御門 經輝

昭和六年徳川家新築の際日本鑿泉合資會社に依つて鑿井を行つたが、其の鑿井地質標本を見ることが出来たので簡單に報告したいと思ふ。

鑿井を行つた場所は目白町四丁目四十一番地で目白驛の北西約二百米の處である。此の附近は所謂山手で海拔三十米の高臺を成してゐる。鑿井は地表から四百一尺五寸の深さ迄達し、其の間地表下百六十三尺の處で貝層に、二百十尺と二百四十九尺の處で貝殻の破片を有する砂層に出合ひ、二百八十尺・三百七十五尺の處に貝殻の破片を含む礫層がある。

鑿井標本に依つて作つた截斷圖は次の頁に示す通りである。

III. V の礫は大き徑〇・五乃至一厘の角のある礫で、V の礫層では下部の方が礫は僅に大きき。XVI. の礫層は圓礫から成り、礫の大きは〇・二乃至〇・五厘である。XIX 砂礫層の礫も圓く大さも XVI のものと大差なす。III. V の礫層は河成と思はれる、XVI. XIX の礫層及び砂礫層は貝殻の破片のあることに依り明かに海成である。

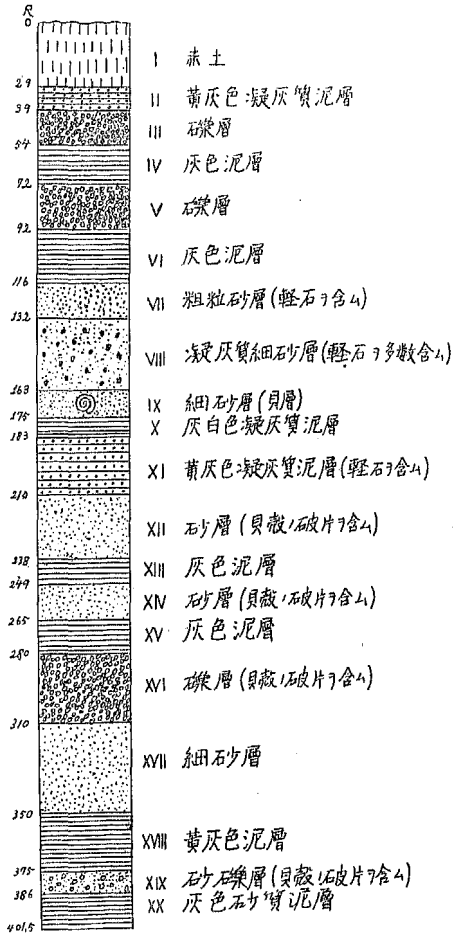
IX 砂層の貝化石の中同定出来たものは次の六種である。

Macoma tokyoensis Makiyama.

Solen krusenstermi Schrenck.

Macra dunkeri Yokoyama.

目白町鑿井地質截斷圖



Natica (Tectonatica) janthostoma Desha-
yes.

Neveritaformis (Neverita) didyma (Bolten).

Suavodrillia declivis (Martens).

その他 Ostrea sp. (破片) Sanguinolaria (Soletellina) sp. (幼貝) 及び其の他貝殻の破片が多数ある。以上の中で目につくものは Solen krusenstermi Schrenck, Suavodrillia declivis

(Martens) で、後者は保存も良い。XII 砂層には貝殻の破片が僅に含まれて居る。XIV 砂層には Neveritaformis (Neverita) didyma (Bolten) の幼貝 Ringicula yokoyamai Takeyama MS. 其の他貝殻の破片及び海膽・藤壺の破片が小數ある。XVI 礫層には Natica (Tectonatica) janthostoma Deshayes の幼貝及び介殼の破片があら、XIX 砂礫層にも貝殻の破片が含まれ

てゐる。目白驛の南東側では赤土の下に一米許りの粘土層、其の下に砂礫の層があり、同驛の南西の崖に二・三米の砂利層のあることを永澤學士が觀察され、是等を成田層とされた。(理學界、第三十卷第十號) 目白の高臺は約三十米であるからV礫層は崖の下部の方に露出するわけで、目白驛南東側に於ける赤土の下の粘土層はIIに、其の下の砂礫層はIIIに當るであらう。

IからV迄は昭和四年復興局建築部で發表された東京及横濱地質調査報告の洪積層に相當し、IXの貝層は同報告の第三紀層上部層下部か或は中部層上部のものであらう。

鑿井であるから地層間の關係が分らず、且つ僅かの化石で是等の地層の對比を行ふのは危険

であるが、上部の方は田端に於ける層序と非常によく似てゐる。III, Vの河成礫層は山手層に相當し、VI, VIIには化石は無いが上下の地層の關係から成田層に當ると思はれる。IXに含まれる化石の内特に *Macoma tokyoensis* *Makiyama* 及び *Suavodrillia declivis* (Martens) は王子介層に多く、其の他のものも田端・王子・品川の貝層によく知られてゐる。東京層は何所でも多少凝灰質である事から考へてもIXの貝層は東京層、即ち洪積層下部のものであらう。

東京層より下の地層の露出は山ノ手の崖に無くXII以下の地層に就ては鑿井の記録に依るより他はないが、是等の地層は復興局の前述の報告の第三紀層中部層に當ると思はれる。(完)